

湘南の由来とエリアを探る

その1

京都西芳寺 湘南亭

文責：和田精二

はじめに

湘南遺産プロジェクトについて説明すると、湘南はどこからどこまで？とか、湘南の由来は？と質問されることがあります。湘南の地域呼称は山の手や下町と同じようにイメージ呼称ですから、明確に答えるのは意味が薄いし、湘南のイメージも時代と共に変化します。ただし、湘南の由来については文献をたどっていけば、いつからどのような経緯で湘南という呼称が使われ始めて現在に至ったかが明らかになっていくはず。ということで、湘南についてまずは文献調査からスタートしてみました。

1-1 湘南の由来には2つの説がある

「湘南」という地域呼称の由来には2つの説があります。ひとつは相模の南をさす「相南」という言葉に起因するという説、もうひとつは中国の名勝地に起因する文芸趣味が時代を経て地域呼称となったという説です。一般的には後者の方が優勢なようですので、後者から調査した結果をご報告いたします。

1-2 なぜ京都に「湘南亭」があるの？

いささか唐突ですが、「湘南」の由来をたどるには京都の西にある西芳寺の茶室「湘南亭」を説明することが最適と思います。なぜ京都の寺の庭園に「湘南」と名のつく茶室があるのか、いつ、だれがその建物を「湘南亭」と名づけたのか、その「湘南」が、現在「湘南」といわれている地域呼称の「湘南」とどこでつながってくるのか、この謎を追求することで湘南の由来を解明できるように思えます。

西芳寺は1994年に「古都京都の文化財」の17社寺・城のひとつとして世界遺産に登録されましたのでご存じの方も多

いと思います。この寺は約1300年前に聖徳太子の別荘地として開かれてから、奈良時代に聖武天皇の詔により行基が開山し、鎌倉初期に法然上人により法相宗（ほっそうしゅう）から浄土宗に改宗されています。「湘南」につながるののは、歴応2年（1339）、近くにある松尾大社の宮司・藤原親秀（ちかひで）が作庭の名手と誉れ高かった「夢窓疎石」を招請したことに始まります。このとき齢65歳の夢窓疎石が庭園の造営に情熱を注ぎ、藤原親秀が伽藍の復興に力を注いだ結果、荒廃していたこの寺が禅宗（臨済宗）の寺院として蘇ったと言います。（同時に西方寺を西芳寺に改称）

現在、西芳寺は苔寺という名称で親しまれていますが、苔が自然に生えてきたのは江戸時代末期からです。現在120種の苔が庭園を覆っていますが、観光公害問題があった関係で一般公開から少数参拝制となり、現在は写経などの宗教行事に参加することでのみ見学が可能となっています。夢窓疎石が作庭した庭園については、疎石の弟子や中国からの渡来僧、明の学者などの記録が多数残されていることから当時の西芳寺の庭園のどびぬけた人気に分かります。光厳、光明両上皇、貞成親王や足利尊氏、足利義満などの歴代将軍が庭園で遊んだといいますが、義満はこの寺の庭を模して北山殿を、義政は東山殿を造営しています。貞成親王の場合、「西芳寺の風景をうつさる」といわれたように、西芳寺の庭園を模した伏見殿をつくりました。足利義政の母に至っては、西芳寺庭園の美しさを聞くにつけ見たくてたまらなかつたようですが、女人禁制の禅の修行場は将軍の母でも入場禁止のため、義政が母の住む高倉御所に1木1草も違えず西芳寺庭園をうつしたといわれています。日本人ばかりでなく、中国人の僧も賞嘆し中国の画師も庭園の図を描いています。朝鮮の使節申叔舟などは、庭を見た夜は寝つかれず、仮睡の中に出てきた翁と問答をし、京都の諸寺の庭園で西芳寺の庭園に匹敵するものはなかったと回答したり、翁に請われて詩をつくって目が覚めた、という内容の記録を残しているほどです。室町時代におけるもっとも優れた庭園と呼ばれただけに、まことにスケールの大きい話ではあります。

1-3 西芳寺の庭園ってどんな庭園？

さて、西芳寺の庭園は上段と下段のエリアに分かれています。平安朝時代の庭づくりから室町時代の庭づくりへ、表現を変えれば大和絵から山水画へと変化する時代性を上下の庭園に配置しながら、両者を併存させる記念碑的な庭づくりを夢窓疎石は行っています。



京都西芳寺 黄金池（出典：原色日本の美術 10 小学館）

まず下段エリアですが、平安朝からの池泉廻遊式の寝殿づくりに根ざした池を巡らす庭園で、池の周囲に配置された堂や閣は地形の凹凸に応じて曲折しながら連なる廊によって結ばれ、その景観は中国の庭園と思しき雰囲気であったといえます。疎石は西方寺時代からの黄金池をさらに広げて心字の形とし、そこに島々を配し洲崎をしつらえました。その島々の内、瑠璃殿の南の島に「湘南亭」と名づけた建物を、北の島に「譚北（たんぼく）亭」と名づけた建物を構えました。ここでようやく「湘南」の登場ですが、「譚北」ともども後で述べたいと思います。

こうした平安朝の浄土教的・他力的自然観に基づく庭園様式を取り入れた下段エリアに対し、上段エリアは禅宗の自力的自然観に基づく庭づくりがなされ、禅宗文化の新しい息吹を感じさせる大胆な構想が展開されました。岩や石や砂を配して水がないのに水を感じさせる枯山水を龍安寺などに先駆けて実現してしまった疎石の才能には唖然とさせられます。枯山水の思想は禅宗文化そのものですから、これが鎌倉の五山文化へつながり、西行につながり、大磯の鳴立庵へつながって、やがて湘南遺産にたどり着く！という予感がいたします。

室町時代の応仁元年（1467）から10年も続いた応仁の乱で京都全域が主戦場となったときに、西芳寺も寺院内の建物を全て焼かれてしまいましたが、湘南亭は島の中にあったこともあり、唯一焼失を免れています。その後、廃跡と化しますが、その湘南亭を再び蘇らせたのが、茶道千家流の始祖である千利休の次男の少庵で、池の南にあらたに湘南亭を建て、自ら隠棲していたようです。ただし、疎石が作庭したときの湘南亭は茶室ではなく、休憩所のような建物だったようです。

西芳寺は、以降何度も人災や天災にあいましたが、浄土真宗中興の祖といわれる蓮如や今川義元等の他、宗旨を異にする門徒や西芳寺周辺の村々からの寄進によって復興してきました。そういう歴史もあり、今でもなお草創当時の夢窓疎石を偲ぶことが出来るのは殊の外有難いことと思えます。

1-4 夢窓疎石（国師）ってどういう人？

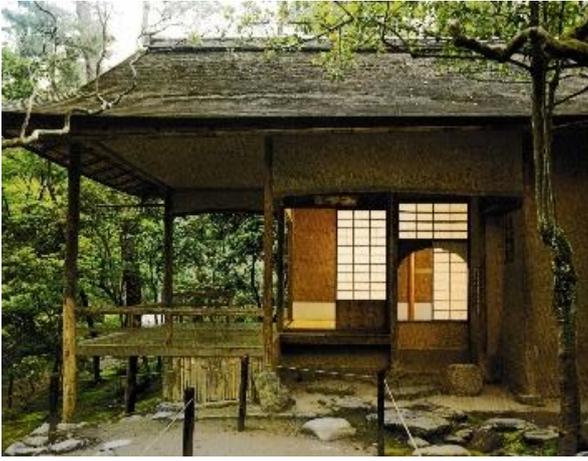
さて、ここで夢窓疎石について述べます。疎石は鎌倉時代から南北朝時代、室町時代初期にかけての臨済宗の禅僧です。在世時代には夢窓国師と呼ばれ、大灯国師と共に禅僧の双璧といわれただけでなく、後醍醐天皇以下7代の天皇の帰依を一身に受けたといえます。一方で庭園デザイナーとして、京都の天龍寺、鎌倉の円覚寺・瑞泉寺（臨済宗円覚寺派）、多治見の永保寺、甲州の恵林寺、身延の覚林房などの庭を造園しただけでなく、歌集を残すほど和歌にも長けていたといえますから、禅僧としては感性面で突出した僧だったようです。



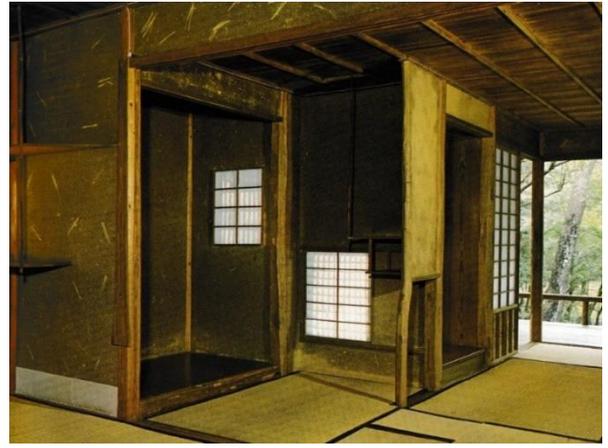
夢窓疎石像 重文鎌倉瑞泉寺（出典：原色日本の美術 10 小学館）

疎石は隠遁を好み、山水を愛し、景勝の地を求めて、土佐、横須賀、上総、美濃、鎌倉と名勝の地に次々と庵居を移しました。禅僧だけに、鎌倉との関わり方は強く、鎌倉の瑞泉寺に庵居を求め、岩窟の中で座禅を組んでいたといえます。人里離れた清境に書齋を構えて、自然を友とし、読書三昧に過ごすというのが、当時の禅僧のあこがれだったようですが、疎石は心からの自然愛好者で、景勝の地を求めて転々としながら禅僧の生活を送っていた訳です。

1-5 「湘南亭」と名づけたのは誰？



京都西芳寺 湘南亭（出典：原色日本の美術 15 小学館）



京都西芳寺 湘南亭（出典：原色日本の美術 15 小学館）

西芳寺の庭園の上段にある指東庵とその枯山水は夢窓疎石が禅修行のうで長く思慕してきた亮座主（唐時代の僧）の故事から構想したといわれています。また、下段の庭園内の池や建物などに黄金池、無縫塔、瑠璃殿、湘南亭、譚北亭、合同船（亭）と命名した理由は、肅宗皇帝（唐）と耽源禅師との問答の故事からの発想にあるといえます。

いよいよ問題の「湘南」ですが、故事にあった「湘南」と「譚北」という呼称は、湘水（次回説明します）に沿った都邑、湘潭のあたりにちなむ勝境の雅語です。「湘南」という地域は、現在の中国の湖南省を流れる湘江の南部を指し、かつては長沙国湘南県が存在し、中世には禅宗のメッカであったといわれた地域です。この時代に中国からやってきたのが禅宗ですが、禅宗はそれまでの中国仏教になかった老荘思想をとりこみ、さらに座禅という厳しい戒律の制度を持っていたので、それが日本の武士の精神とぴったり合いました。たちまち鎌倉五山や京都五山となった中国様式の禅寺がつくられ、日本に広まっていくこととなります。鎌倉時代も13世紀半ばの建長年間ごろからは、古代仏教の伝統の濃い京都を遠く離れて、鎌倉の地が禅宗興隆の1大中心地となりますが、その主軸となった禅寺が建長寺と円覚寺の両院でした。夢窓疎石は円覚寺の作庭もしていますが、中国の湖南省に題材をとる故事から詩画に至るまで興味も知識も相当なレベルであったことが推定されます。そういう背景があつてこそ、西芳寺の下段の庭園の諸施設を命名するときに「湘南亭」や「譚北亭」を発想したことは容易に想像できます。

今回の文献調査では「湘南亭」を命名した人物を夢窓疎石と断定する文章は発見できませんでしたが、上記の文脈から疎石である可能性は極めて強いように思われます。造園史が専門の田中正大氏は「禅寺の石庭」という文章の中で、「国師（疎石）が室町初期第1の高僧ゆえ、庭の専門家に任せたと考えるのは間違いで、国師が構想し、設計し、直接監督したものである」と強調し（「原色日本の美術 10」）、西芳寺造園時の状況等を記していますから、夢窓疎石が「湘南亭」を命名した信憑性は高いものと思われます。

以上が今回調べた結果ですが、ようやく「湘南亭」の「湘南」が誰によって、どういう目的で命名されたのか判明したように思えます。結論として、「湘南」が使用された最も古い事例は今回調べた歴応2年（1339）に建てられた「湘南亭」のようですが、これから他にも出てくる可能性があるかも知れません。あるとすれば、出処は中国から渡来した禅僧か、中国から帰国した日本人が残した文書辺りと思えますが、「湘南亭」レベルの例はなかなか出てこないでしょうね。

出典資料

- ・原色日本の美術 第10巻 禅寺と石庭 太田・松下・田中 小学館 1967
- ・原色日本の美術 第15巻 桂離宮と茶室 川上・中村 小学館 1967
- ・千年の都・古都京都の文化財 第22回世界遺産委員会支援 京都実行委員会 1998